

ONE LOVE

通信

47号

2012年9月2日発行

人生も長く生きると、体のあちこちにガタがくる。いつまでも若いと思っていたが、体形の崩れや、白髪、はたまた体力の衰えは避けることができない。これからは如何にこれらとうまく付き合っていくかということに焦点をあてよう。

多分人生の折り返し地点は過ぎてしまったが、まだ先は長い。ワンラブが未来永劫続いていくように、この先もがんばるぞ。えいえいお〜!



【祝ルワンダ独立50周年、そして虐殺から18年】

今年の7月、ルワンダは独立から50周年、そして94年の大虐殺終結から18年を迎えた。この時を解放18周年としている。

国内ではそれを祝うために、あちこちに大きなポスターが貼られ、国旗が飾られ、町が一層きれいになった。キガリの中心にある広場でも、勢いよく噴水から水が出ている。

私は植民地支配下の国で生まれて育ったわけではないので、独立〇〇周年と聞いても、あまりピンとこないけれど、実際にその状況下で生きてきた人たちの思いは如何なものだろうか？

やはりそれはルワンダという複雑な歴史を持つ国において、私たちの想像できないような感情が入り混じっているのではないかと思う。

単純に一つの国が、他の国に攻め込まれ支配されたという訳ではなく、ルワンダでは他の国から支配されることにより、国民が憎しみ合うという状況に置かれたから。よくルワンダの虐殺を説明する時に「仲良く暮らしていた隣人同士が殺し合った」と言われるが、彼らの殺戮は植民地にされたことによって引き起こされ、さらに相手を憎むこと

を洗脳され、気がついたら武器を握り締める羽目になってしまったのである。

国を担うべき人間も既に洗脳され、62年に独立してからも、国民はその考えに翻弄されてしまった。それから長い年月が経ち、やっと平和が訪れたのだ。

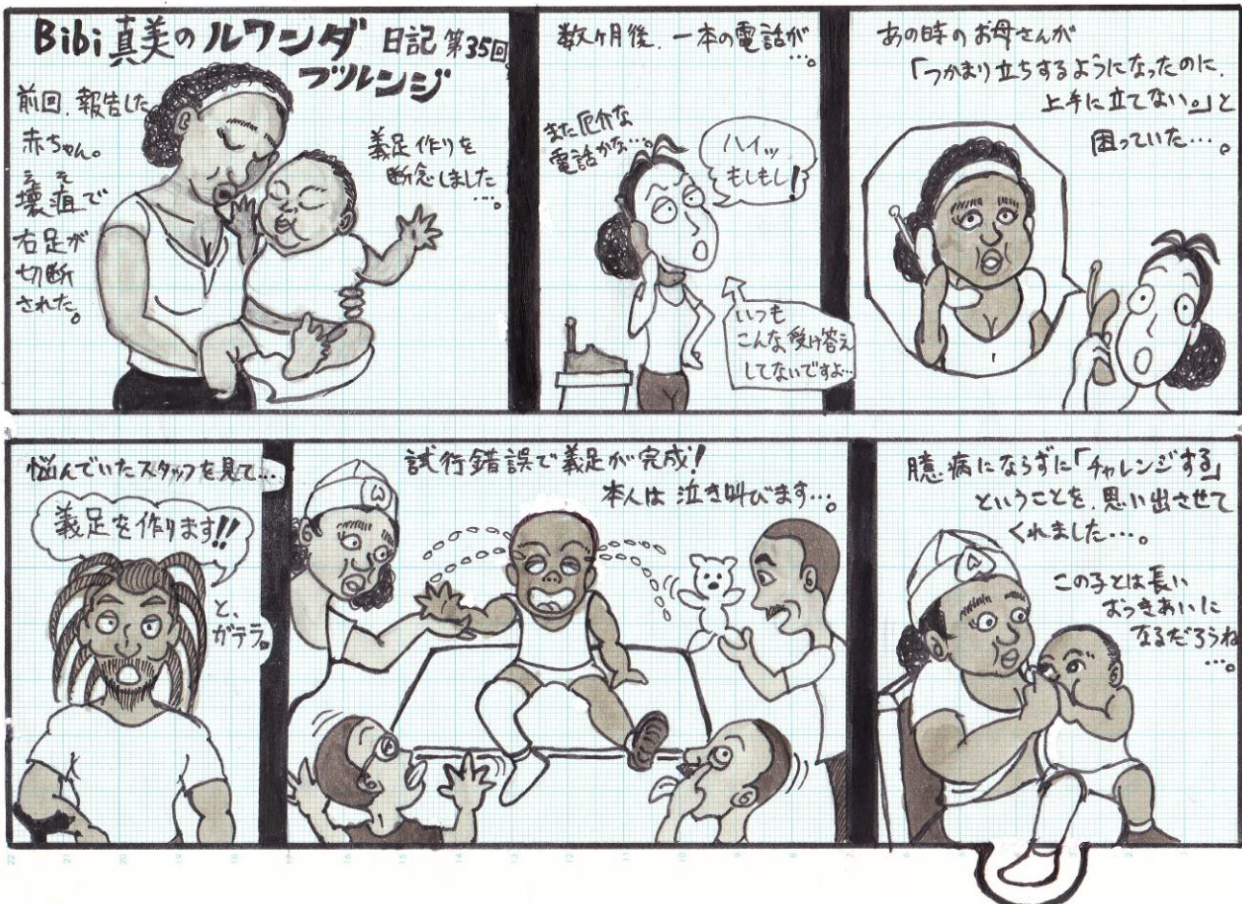
しかし人々の中には、その平和を望まない人もいるというのが事実だ。あるいは今の政治に反旗を翻そうとする人もいる。

独立50周年、そして解放18周年の式典は、そんなさまざまな思いの中、開かれた。

ルワンダで活動を始めた頃は、大きな式典にはなるべく足を運んでいた。式典は大抵国立競技場で行われるが、会場に入る時の押し合いへし合いの体力消耗、あまり意味のないセキュリティチェックなどにうんざりし、最近はおっぱらテレビで中継を見ることにしている。

ルワンダの伝統的な踊りや音楽、そして私が一番楽しみにしているのは、軍隊の行進である。

ルワンダ軍の動きについては、いろいろと意見の飛び交っている昨今ではあるが、94年にルワンダ愛国戦線が虐殺を終わらせた時は、私もテレビを見ながら、拍手を送っ



たものである。その軍隊が一斉に競技場を行進するのだ。

時々列が乱れるものの、それは愛嬌として受け止めよう。軍隊は式典の間中、競技場に不動の姿勢でとどまっている。ルワンダは涼しい気候であるというものの、赤道直下の炎天下。時々あちらでパタン、こちらでパタンと兵士が倒れている。

そして続くは兵士による演習である。柔道だか空手だか良くわからないが、型を披露したり、実際に悪漢が襲ってきた時のシミュレーションをして、ちぎっては投げ、ちぎっては投げする兵士を見て、会場は大いに沸くのだ。

この数年は、女性が悪漢に襲われた時どう対処するか？という演習がある。何年前か、競技場に足を運んだ時は、確か女性の兵士が襲われる役を演じていたっけ。しかし今年ちょっと違っていた。女性の兵士でなく、「女装」をした兵士である。どこの国でもそう演じるのか、女装をした男性は妙にしなを作り、お尻をふりふりしながら歩いている。そこに悪者がやってきて、ちょっかいを出す。最初は相変わらずしなを作りながら拒んでいた彼女(?)たち。しかしかばんをひたたくられたら、いつまでも「やめてよ〜」などと言っていられない。

彼女たちはハイヒールを脱ぎ捨て、飛び蹴りはするわ、パンチは喰らわすわ、一本背負いはするわ、拳句の果てはミニスカートをめくろうとする不屈きものを踏みつけるわで、場内は大喜びである。

そしてそれを見ながら、拍手喝采する私。いや〜、スカットとする、のである。

…とそんなウケを狙った出し物もあるものの、規律の取れた軍の立ち振る舞いを見るのが、私のもっぱらの楽しみとなっている。

独立から50年というのは、私には実感がわからないが、虐殺から18年には思い入れがある。その間にワンラブも足をそろえて、共に進んできたから。開拓されていなかったワンラブランド。今そこは木々が生い茂り、人が集まる場所となっている。

人はいつの世も愛し合い、そして憎しみ合っている。いつも思うのだが、とどのつまり人が求めているのは「愛」なのではないかと。自分を愛するがあまり、欲が出て、人のものまで欲しくなってしまう。これも一つの愛の形なのかもしれない。人の善悪を決めるのは、その愛を向ける対象が何になるかということなのか？自分と人と、バランス良く向けることができれば良いのかな？

キガリ市にある虐殺記念館。そこにはこんなことが書かれている。

「許しなしには、慈愛は存在しない。正義なしには、許しは存在しない。しかし慈愛なしには、正義はあり得ない」

この言葉を本当に理解するには、まだまだ時間がかかりそうだ。一体誰が、どんな思いでこの言葉を書いたのだろう。

そして式典の時に、カガメ大統領が言った言葉。

「成功までの近道はないーThere is no short-cut to success」

何かを成し遂げたいと思ったら、努力なしにはあり得ないということかな。だったらまだまだやらなくちゃならないことがたくさんありそうだ。



大虐殺のあったスタラマ教会。毎年4月には多くの人々が訪れ、亡くなった人に思いを寄せます。

いつまでたっても問題が目の前にあるワンラブだけど、あと34年後には50周年を迎えます。う〜ん、その時まで私が生きているか非常に微妙な頃ではありますが、例えばガテラと私がいなくなっても、ぜひ50周年記念を迎えたいと願うのであります。

さあ、あとに続くものは名乗りをあげよ！そしてワンラブの50周年式典を、盛大にやってくださいませ！

【やっと渡せた義援金】

去年3月11日に東北地方を襲った地震と津波。家族や友人を失った悲しみ、家が流され、仕事を失った人々の苦しみは想像するにあまりある。

地震が起こってから、ルワンダの人たちが日本人たちにかけてくれた復興への思いには、本当に感謝をする。

震災後そんな彼らの思いを受けて、ワンラブランド内のレストランでチャリティディナーを開いた。ルワンダでも大虐殺の際に、たくさんの命が失われた。だから人を失った時に感じる思いは同じである。

当日演奏するバンドも無償で引き受けてくれた。いつもならギャラの取り合いで喧嘩をするくせに…。

その日はたくさんの人たちが集まってくれた。ルワンダ人だけでなく、現地にいる日本人や外国人の人、みんな演奏と食事を楽しんでくれた。そしていつか集めたお金を被災地の人たちに届けたいと、ガテラと二人願っていた。

しかし去年の暮れから今年の初めにかけて来日した時は、タイミングが合わず、残念ながらその機会を逃してしまった。思いを残して離日。

しかし！ やっとその時が来ました。

7月に私ルダシングワ真美は私用のため一時帰国し、今を逃したらもう遅過ぎると思い、気仙沼の障害者の施設に義援金を渡しに行きました。

ワンラブは障害者を支援するNGO、ぜひ東北でも障害者の施設を支援したい。仙台の大学に勤めている先生の力を借り、見つけたのは気仙沼にある老人ホームや障害者支援施設を運営しているところ。

代表の方は津波で家を失ってしまったという。施設も大変な被害を受けたそうだ。その時から今日まで、どんな苦労があったことだろう。でも話をしていると、そんな辛さは見せず、淡々と当時の様子を語る。人間って、強いな。私もまだ弱音を吐いちゃいけないな。

障害者の作業所も見せてもらった。あいにく日曜日だっ

たため、作業をしている人には会えなかったけれど、年季の入った建物の中で携帯ストラップを作ったり、天草の加工をしているらしい。きっとこの天草で作ったトコロテン、美味しいだろうな。



遅くなりましたが、どうぞ、気仙沼の障害者たちが、踏ん張れますように。

震災後初めて訪れる東北地方。写真や映像からは見えてこないことがたくさんあった。

丘に木が生えている。でも下の方は赤く枯れている。ここまで海水が押し寄せたのだ。海岸近くの道路に立つと、海が見える。でも本来その場所からは海など見えなかったようだ。つまり足元を見ると、家の基礎だけ残っている。

こんなふうにも何も知らないで、その町に立ったなら、まだ開拓されていない土地に見えてしまう。しかしそこには紛れもなく人の息吹があったのだ。

列車の線路もねじ切られ、一体いつになったら復旧するのだろう。まだやらなくてはならないことがたくさんある。これからも人の手が必要に違いない。

今回、私一人でこの町を訪れたけれど、今度こそガテラと一緒に訪れ、無力かもしれないけれど、何かを分け合うことができればと思う。私もガテラも津波の怖さは経験したことがない。情報として知っているのみだ。だから自分たちの目で見ることが必要。

現場の状況を知った上で、まずは私自身が、そこで加工

された天草で作ったトコロテンを食べて「おいしかったよ」と宣伝するところから始まるのかもしれない。ガテラもトコロテン食べるかな？

【ブルンジの巡回診療】

この数年、ブルンジで義足を作るための巡回診療を行っています。ブルンジには17の県があり、義肢装具士と一緒に材料などを車に乗せ、地方に住む障害者を訪ねます。

巡回診療はとにかくしんどいです。長距離を車で揺られることもさながら、集まってきた人々を右から左にさばっていくのが一苦労。必ずひと悶着あります。

まずアフリカをご存知の方は、うなずいて下さることと思いますが、とにかく彼ら、並びません。もっともあんなに整然とレストランの前で、お腹がすいているにもかかわらず、じっと眼をつぶって並ぶのは、日本人だけかかもしれません。アフリカの皆さまは、自分が少しでも前に行きたいから、列など作りません。ねじもぐったもの勝ちです。私も何度彼らのことを殴ってやろうかと思ったことでしょう。それ故、とにかく肘を突っ込むべしという技も身につけました。しかし最近は悟りをひらき、彼らの好きなようにさせています。…というよりは、自分で怒鳴るのが嫌なので、嫌な仕事は全てスタッフに任せてしまいます。

巡回診療中、私はひたすら記録係として写真を撮ったり、スタッフが怒鳴っているのを見て「あんなふうにはステリックになりたくない」などとつぶやくのでした。

集まった障害者を前に、誰に義足を作ろうかと頭を抱えます。みんなに平等に義足を作りたい、でも予算も乏しく、一つの県では10人が限度。ここでもまた、障害者同士譲り合おうなんて、なかなか思う人はいません。「オレの義足を作れ」「おまえより、ワシのほうが大変なんじゃ」と、と



ルワンダ事務所代表ガテラより

【臆病と無鉄砲】

真美と知り合って、もう20年以上になるが、今でもお互いの違いを感じる事がしばしばある。

特に違いを見つけるのは「怖れ」の感じ方である。

真美はまだ見ぬものに対して怖れを感じ、私は見てきたことに怖れを感じる。

生まれてから今まで、ルワンダで数多くの辛いことを見てきた。特にすさまじかったのは大虐殺である。あるものは殺し、あるものは殺され、自分もその中を生き抜いてきた。今、この年になって、やっと国が落ち着き、自分の人生はこれからだと感じている。その間、一通りの試練も受けたように思う。

しかし真美はそんな激動の時代を生きて来なかった。だからその激しさや厳しさがどんなものかを知らない。

そのため、二人の「怖れ」に対する違いが出てくるのだ。その違いのために、仕事でぶつかり合うことも少なくない。

私から見れば、真美はとても臆病に思えるし、真美から見たら、私は無鉄砲に思えるのだろう。

でもまだ見ぬことを恐れ過ぎていては、先に進むことができない。とにかくやってみて、ダメだとわかった時点で、引き返すこともできる。もちろんやり直すこともできる。

先のことを心配し過ぎて、あるいは失敗することを恐れて、やらずに終わってしまったら、きっと死ぬ時に後悔するに違いない。

「案ずるより産むがやすし」と日本では言うらしい。そして「石橋をたたいて渡る」ということわざもあるらしい。その二つをうまく具合に混ぜ合わせ、これからもやっていけば良いのではないかな？

コンピを組んで、早20余年。ブレーキとアクセルをうまく調節しながら、ワンラブは進んでいくのである。

そして果たしてその手綱を握るのは、どっち？

*ガテラのコラムは何語？と言う質問を受けました。これはガテラが真美とスワヒリ語で会話をしていることを、メモに残し、それをコラムとしてまとめているのであります。

にかく自分を主張します。人間とはやはり「欲」の生き物なのですね。

そんな戦いが繰り返られるので、ぐったりです。しかし一番ぐったりしているのは私のです。いつまでたっても彼らの立ち振る舞いに慣れることができません、日本人を引きずってしまう私。

そんなわがままな障害者を尻目に、スタッフは今日もみんな一杯やるようです。仕事が終わった後のビールがうまいのはわかる。しかし彼らのパワーについていくことができなくなっている自分が悲しい。再び体力を取り戻すことができるのか？今が人生の瀬戸際であります。

ルワンダとブルンジのスタッフ、そして障害者とつきあいながら、つくづく彼らのような強引さとたくましさが好きだと願っている私です。



今号の患者さん

前号で赤ちゃんの義足が作れなかったとお知らせしました。

しかし吉報です！作りました！その赤ちゃんの義足を！

日本からルワンダに戻り、いつも通りに仕事をしていると一本の電話が。普段かかってくる電話は厄介なものが多い。「お金を貸してくれ」とか「仕事を世話してくれ」とか。だから電話口に出る私の声は不機嫌そのものです。

その日も全く愛想のない声で対応すると、なんだかいつもと様子が違う。あの時赤ちゃんを連れてきたお母さんからの電話でした。

赤ちゃんは成長し、既につかまり立ちをするようになってきている。片足なので、せっかくつかまり立ちをしようとしても、上手に立てない。何とかならないか？と言うのである。

う〜ん、この間その赤ちゃんを見た時は、あまりの小ささにビビってしまい、義足を作ることなく帰してしまったが、それを聞いたガテラは一言「とにかくもう一度来なさい。」

確かにあのときよりもずっと大きくなっている。あの時は赤ちゃんと言う印象だったが、今は子坊主と言う感じだ。その子を見たガテラはまた一言「義足を作りなさい。」

躊躇しているのは私を先頭に、ルワンダの義肢装具士たちだ。エマーブルも作ったことがないから、本当ならばまだ作りたくないと思っているのだが、ガテラの鶴の一声には勝てない。

普段やっているのと同じように、切断部の型をとり、製作に取り掛かる。本当にこんなにちっちゃい子が義足を履けるのだろうか？皮膚が柔らかいから、すぐに傷を作ってしまうのではないかと心配しながら。

そして出来上がり、今日は義足を履かせてみる日。

ただならぬ雰囲気を感じたその坊主は、最初から泣き通しである。今日ばかりはお母さんも敵に見えるらしい。お母さんの腕の中で、体をぶんぶん振り回しながら抵抗している。

履かせてみた。思ったよりも、足がきれいにおさまっている。しかしやはり泣き叫ぶのである。そりゃそうだ。こんなもの見たことも触ったこともない。



ただ今、大泣き中。
右足が義足です。この坊主の泣き声には、ワンラブの番犬もびっくり。
将来大物になること間違いなし。

義足で歩くことはまだ無理だけど、慣らさなくてはいけないので、お母さんに抱っこされながら義足を履く。痛いのかな？窮屈なのかな？言葉が話せないから、どう感じているのかわからない。泣いているから、とにかく嫌なんだろうなあってことしかわからない。

赤ちゃんの周りには、ワンラブのスタッフが集まってきた。おもちゃを持ってきてあやす人、変な顔をして坊主を笑わせようとする人、虎の子を崖の下に突き落としている親虎のように、じっとその様子を眺めている人（ガテラはこのタイプ）、さまざまである。

格闘すること1時間。坊主は初めての試練を乗り越えました。今、僕が履いているものは一体なんだ？と思っているだろうけど、とにかく最大の山は越えたのです。



やっぱりここが一番落ち着くわい。
それにしても、みんなどうしてこんなものを僕に履かせるのかなあ。
人生は大変だよ。

今は落ち着いてお母さんのおっぱいを飲んでます。そんな坊主の姿を見ていると、ここでまた「案ずるより産むがやすし」と思ってしまう。この間あんなにあれこれ考えて、結局義足を作るのをやめてしまったが、ガテラのゴーサインによって、いと簡単に作ることに。そして作ってみると、思ったより早く子供は順応してしまう。

そんなものかもしれないな。いろいろな症状の患者さんがやってくるけど、私は難しそうな義足になりそうだと、そのまま帰ってしまうこともある。今回は良い勉強になりました。まずトライするというのを思い出させてくれました。人間、守るものが増えてくると、どうしても臆病になる。でも最初の頃は、私も結構突っ走っていたはず。ガテラのチャレンジ精神を目の当たりにし、再び突っ走ろうと思いなおした日でした。

紹介します！ワンラブのスタッフ

ブルンジの義肢製作所で働いているフランソワズと言う女性のお話です。

フランソワズはまだ若い女性です。会計や仕事の段取り、その他雑務もこなしています。彼女はルワンダ人で、もともとワンラブのレストランの会計を任せられていました。でも鼻っ柱が強く、いつもガテラと対立。「もう辞める」と何度も宣言し、その都度しばらくすると「やっぱりまた働かせて…」と戻ってきました。

本来仕事に対してはまっすぐに取り組みます。だからお金を管理する仕事も安心して任せることができ、今ではブルンジオフィスの金庫番となっています。

でも彼女にはつらい過去がありました。94年ルワンダ大虐殺のあった時、彼女は9歳でした。家族は殺され、残ったのはたった一人の弟。その弟とも生き別れになり、虐殺の中、彼女も生き残るために必死だったそうです。そんな時一人の白人Aさんに助けられました。でもまだ虐殺は続いています。このままではいつ殺されるかわかりません。

逃げ込んだ先は、あの映画「ホテルルワンダ」でも有名になったHotel des Milles Collinesです。そこには虐殺を逃れたルワンダ人がたくさん集まっています。フランソワズはAさんに連れられ、みんなと大広間にかくまわれました。疲れ切っている人たちでごった返したその広間、こんな環境では休むことはできません。しかも広間にいる人たちは、みすばらしいし、邪魔なので、ホテルの従業員たちは彼らを追い払おうとします。それを見かねたAさんは、ホテルの支配人にお金を握らせ、彼らを助けようとしています。

当時、そのホテルではフランソワズのようにお金を払ってかくまわれた人たちでいっぱいになっていたということです。お金の払えなかった人たちは、そのまま追い返され、民兵たちに捕まり、殺されてしまいました。

ホテルにかくまわれたフランソワズは食べ物もなく、Aさんが運んでくる食料を食べながら生き延びました。水道設備も壊れてしまっていたので、煮炊きをしたり、洗濯・身体を拭くための水はプールに張ってある水を使いました。

しかしそこは決して安全な場所ではありませんでした。何故ならば、そこには逃げてきた彼女たちだけでなく、敵である民兵たちも生活をしていましたからです。昼夜問わず、民兵たちは「次は誰を殺そう？」とやってきます。毎日怯える日々が続きます。

民兵たちはそれでも一応、部屋に入る時はノックをしたのですが、彼女たちは生き延びるために自分たちのノックの方法を変えました。この方法でノックをしたら味方、違う方法だったら敵と区別をし、民兵がノックした時は決してドアを開けないようにしました。

フランソワズはいつ殺されても不思議でない日々を送っていましたが、民兵にとって逃げ込んできた彼女たちは、良い金づるでもありました。だから簡単には殺しません。Aさんは彼女たちを助けるために、一体いくら支配人にお

金を払ったのでしょうか。その金額は決して少なくなかったはずで

す。そしてその後、平和を取り戻すためにルワンダ愛国戦線がやってきます。既にルワンダの多くの場所を、その手に治めました。もう少しです、もう少し生き延びることができたら、助け出してもらうことができます。

愛国戦線に助けられた人たちは、国立競技場に集められました。その中には、虐殺に加担して捕まった民兵たちもいます。そしてホテルに逃げ込んだ人たちと、競技場にいる民兵を交換するという条件で、やっとフランソワズはいつ殺されるかわからないホテルから脱出したのです。

その後、弟とも無事に再会し、弟は大学で勉強を、フランソワズはワンラブで働いています。



何故か巡回診療中、自転車タクシーを乗っ取るフランソワズ。そんなことをせず、仕事をしなさい！

ここで彼女の話とは少しずれてしまうけれど、伝えなくてはいけないことが一つ。

日本では「ホテルルワンダ」を見てルワンダを知った人が多いと思いますが、あの映画はノンフィクションではないということです。映画の中では支配人は逃げ込んだ人をかくまった英雄として描かれています。逃げ込んだ人をかくまったというのは事実です。でもその裏でお金が動いていたということが真実です。その真実が隠されているから、ルワンダではあの映画は支持されていません。それでもルワンダの大虐殺を世界に伝えるためには、良い手段だったと思う人もいるかもしれませんが、でも私は彼女たちの壮絶な話を聞くと、表の光の部分だけでなく、裏の闇の世界も描くべきだったと思わずにはいられません。映画の動員数を増やすために、単にハリウッドのヒーロー物語にしてみようことよりも、私はあの状況を生き抜いてきた人たちに敬意を示すために、そしてお金が払えず殺された人々のためにも、真実を忠実に描くべきだったのではと思うのです。

幼い頃、その時代を生き延びた彼女は、たくさんのことを見たはずで

す。家族も失いました。私たちはもともと何もつながりはありませんでした。でも仕事を探しにワンラブにやってきて、レストランの仕事をすることになりました。レストランの仕事は夜なので、昼間は学校に通わせました。給料は決して多いとは言えない額だったので、学費も支援しました。そして今、彼女はブルンジのワンラブで働きながら、夕方学校に通っています。



日本事務所より

【ひとりごと】

7月に私用で日本に一時帰国した。ちょうどオリンピックの時期。自分が世界に興味がなかった時は、開会式はダラダラ続く、つまらない儀式だと思っていたが、今は一番楽しみな時間となっている。そして自分の知らない国や国旗を見ては、どんな国なのだろうかと思いをはせる。それにしてもまだまだ知らない国の多いことよ。

面白いのはアジアやアフリカ、南アメリカからの選手団である。何が面白いのかと言えば、その衣装だ。実に個性的ではないか。それに比べ、先進国の選手団の衣装の、何と平凡でつまらないこと。みんな同じようなスタイルに見える。どんな有名なデザイナーが手掛けたとしても、その国の民族衣装ほどじっくりくる出で立ちはない。アジア・アフリカなどの選手たちが、素晴らしい民族衣装があるにもかかわらず、先進国の真似をしてプレザーやトレーニングウェアで入場しているのを見ると、なんだかがっかり来る。その点、槍を持って登場したブルンジの選手団はかっこよかった。だから日本の選手団は、ぜひ紋付袴や着物を着て入場してほしいなあ。それだと歩きづらいというのであれば、せめて浴衣姿で入場行進をしてもらいたいものである。楚々として良いではないか。

ルワンダは“R”で始まるので、入場するのも後ろの方だ。選手たちの姿を見て、知っている顔はないかと探してしまう。ルワンダはそんなふうに、どこに行っても知り合いに出会うような小さな国なのだ。

しかし選手たちの顔は、みな生き生きと、得意げである。その顔を見て、2000年のパラリンピックの開会式にルワンダの選手団と出場した時のことを思い出す。あれから干支を一回りしてしまっただけで、あの時感じた以上の快感を未だ味わっていない。

本当はこんなふうに世界中の人々が一つになって笑顔を見せ合えば、一番いいんだろうな。でもオリンピックから離れた場所では、野望や野心が渦巻いている。

一度、世界中全ての人にアンケートをとってみようよ。国連辺りが指揮をとって。オリンピックの映像を見ると、戦争で人が死んでいく姿を見ると、どっちがいいかって。

私は信じている。みんなオリンピックを見たがっているって。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信46号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（3月～6月）。

3月	752,600円
4月	333,125円
5月	263,182円
6月	234,950円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました（7月31日現在）。

義足	23本
装具	18本
杖	54人
車いす	5人

*そして現在、ブルンジの巡回診療で型取りをした人たちの義足製作中！

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【引き続き物資支援のお願い】

46号で皆さまに物資支援のお願いをさせていただきました。現在引き続き物資を集めております。来年日本に戻ってきた時を目処に、物資をコンテナに積み込み、ルワンダへ輸送したいと思っております。

集めているのは以下の物資：

- ミシン：足踏み・電動OKです。
- コンピューター類：PC・プリンター・スキャナー・コピー機など、いずれも壊れていないものに限ります。但し型によってはルワンダで使用しづらいものもあるため、事前にご連絡ください。
- 義足・杖・盲人杖・車いす・補聴器など：中古OK。但しきれいなものに限ります。
- 靴：ブルンジ・ルワンダの皆さんに配ります。運動靴などは、必ずきれいに洗ってね。
- 文具類：ノート・ボールペンなど。新品に限ります。
- タオル・衣類・石鹸など：衣類は洗濯済みで、ほつれなどのないもの。

*その他、こんなのだらう？と思われるものは、まずご連絡ください。

物資の送り先：

〒311-0133 茨城県那珂市鴻巣615-2
佐藤淑子あて

（*茅ヶ崎の住所に送っても、ルダシングワ真美不在のため、うけとることができません。ご注意ください）

*また物資の輸送費として、段ボール一箱につき1,000円のご寄付をお願いしております。輸送費のみのご支援も受付けています。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 TEL: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパ・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信47号 2012年9月

発行：ムリンディ/ジャパ・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project